

在外朝鮮族の言語使用と意識

—中国 広東省と韓国 京畿道在住者の比較から—

● 高 木 丈 也

【要旨】

本稿は、中国 広東省、韓国 京畿道に居住する朝鮮族を対象に実施した質問紙調査の結果を通して、在外朝鮮族の（１）言語環境、（２）言語使用、（３）言語意識について分析を行なったものである。本稿の分析で明らかになったことは、以下の３点に要約される：

（１）言語環境

在住年数は広東省、在住予定年数は京畿道で長く、広東省在住者は帰郷志向が、京畿道在住者は定住志向が強い。また、卒業した小・中学校は、地域を問わず、朝鮮族学校が多く、職業は、広東省では流通業、京畿道では肉体労働に従事する人が多い。

（２）言語使用

対話者による言語使用をみると、広東省では対話者によって使用されやすい言語に差異がみられたのに対して、京畿道ではいずれの対話者にも韓国語の使用が総じて多い。また、テレビの視聴については、現地語による番組の視聴が多い。

（３）言語意識

言語能力への自己評価は、広東省では（中国）朝鮮語と漢語で高く、京畿道では韓国語で高い。また、聞いて理解するのが難しい韓国語の有無は、両地域とも「ある」との回答が多いものの、その比率は、広東省で高く、京畿道で低い。さらに、今後重要な言語は、両地域とも韓国語を選択する被験者が多い一方で、子供への（中国）朝鮮語教育については、両地域とも「必ず教えない」という被験者が多い（ただし、その比率は広東省で高い）。

1. はじめに

中国には、主たる生活言語として朝鮮語を話す人々が多く居住している。彼らは、朝鮮族と呼ばれ、主に19世紀末から1940年代までに朝鮮半島から移住した人々の末裔である。『中国2010年人口普查資料』（第6回人口センサス）によると、朝鮮族は中国全体で183万人ほどの人口を有しており、吉林省、遼寧省、黒龍江省を中心とする中国東北地方に居住しているが、近年、こうした伝統的な集居地域を離れ、中国内の他地域や、中国外へと再移住する人々が増えつつあることが指摘されている（趙貴花（2016）など）。こうした人口移動を誘発した要因として、1978年以降の中国の改革開放政策に伴う沿海都市の経済発展や、1992年の中韓国交修交による労働力需要などをあげることができるが、人の移動は、モノや金の移動をもたらしたのみならず、言語それ自体の存在様式にも大きな影響を与え、ひいては、民族アイデンティティの存続にも少なからぬ影響を与えたであろうと予想される。本稿は、こうした人の移動による言語変化という側面に注目したうえで、中国東北3省以外に居住する朝鮮族を「在外朝鮮族」と名付け、彼らの言語使用、

意識の特徴を概観しようとするものである。具体的には、中国内における事例として広東省沿海部の経済特区地域を、中国外における事例として韓国 京畿道安山市を取り上げ、それぞれの地に暮らす在外朝鮮族の言語使用、意識がどのような共通性、特殊性をみせるかを分析することにする。

2. 先行研究

本章では、在外朝鮮族についての先行研究を（1）中国国内、（2）中国国外（韓国）に分けて概観する。なお、本研究の調査地域である中国 広東省と韓国 京畿道（首都圏）に居住する朝鮮族について言語使用という側面から分析した研究は、管見の限りほとんど存在しないので、ここでは中国都市部、あるいは韓国における在外朝鮮族全般を扱ったものを広範囲に取り上げることとする。

2.1. 中国国内

まずは、中国国内に居住する朝鮮族について扱った論文をみる。

趙貴花(2016)は、北京市朝陽区望京に位置するコリアタウンの形成と、そこに集う多様な人々の関係について記述したものである。同論考によると、望京のコリアタウンは、中国各地から移動してきた朝鮮族と韓国、北朝鮮の人々などが共同で創り上げた多文化、多国籍コミュニティであり、朝鮮族、韓国、北朝鮮の人々は、この街において従来の朝鮮半島と似て非なる形で彼らの文化を再生産しつつも、経済的に緊密な関係を結んでいるという。

南玉瓊(2016)は、朝鮮族の深圳市（広東省）への移動とエスニック・コミュニティの形成について分析したものである。同論文では、広東省朝鮮民族連合会と世界海外韓人貿易協会(OKTA)深圳支部におけるインタビューをもとに、同地域では経済的紐帯と社会的紐帯が相互依存的に存在していること、韓国との関係が朝鮮族コミュニティの形成に大きな役割を果たしていることなどを明らかにしている。

2.2. 韓国国内

次に、韓国国内に居住する朝鮮族について扱った論文をみる。

예동근(2009)は、韓国 安山市、ソウル市九老区の事例を通して、市民団体、地域住民、外国人としての朝鮮族の間にいかなる関係が構築されているかを分析したものである。同論文では、朝鮮族は社会階層的には下位集団に属しており、「韓民族」としての同質的アイデンティティに包摂されることなく韓国に居住していること、また、そうであるがゆえに「中国朝鮮族」であるというアイデンティティが拡大し、コミュニティ構成に重要な役割を果たしていることを明らかにしている。

장안리(2016)は、韓国内に居住する中国朝鮮族の文化的アイデンティティ、社会的資本、少数民族社会について分析したものである。同論文では、在韓朝鮮族のアイデンティティは、居住年数、国籍、家族背景、年齢などによって影響を受けるとしており、中には自らを韓国人であると認識する者もいるという。

以上、在外朝鮮族に関する論考を概観したが、既存の研究をみると、いずれもコミュニティや経済、アイデンティティといった側面から分析したものが多く、言語使用や意識に踏み込んで分析した研究はほとんど存在していないといってよい。こうした状況をふまえ、本稿では、在外朝

鮮族に対し新たな知見を示すべく、調査、分析を行なうことにしたい。

3. 分析、調査の枠組み

3.1. 分析の枠組み

本稿では、具体的言語や変種については、便宜上、以下のような名称を用いて区別することにする：

- (1) (中国) 朝鮮語…中国で朝鮮族により使用されている(朝鮮語の)言語変種の総称。
吉林省においては主に東北(咸鏡道)方言を、遼寧省においては、主に西北(平安道)方言を基層とする。
- (2) 韓国語…韓国において使用されている(朝鮮語の)言語変種の総称。本稿では、主にソウルにおいて使用されている変種を指す。
- (3) 漢語…中国における公用語。漢族の言語。中国語とも称される。
- (4) 混合語…(中国)朝鮮語と漢語によるコード・スイッチング(code-switching)、あるいはコード・ミキシング(code-mixing)を伴う言語(使用形態)。

3.2. 分析の枠組み

本稿では、中国 広東省および、韓国 京畿道安山市¹に居住する朝鮮族に対して実施した言語使用、意識に関する質問紙調査の結果と、調査協力機関の職員に対して実施したインタビューの結果を分析する。本調査の概要、および被験者の属性、調査地域の地図は、以下のとおりである：

【表1】調査の概要^{2,3}

		中国・広東省		韓国・京畿道 安山市		
調査協力機関		広東省朝鮮民族連合会		安山市多文化支援本部		
調査時期		2017年6～7月		2016年8～9月		
調査人数		75人		83人		
被験者の属性	20代	男性	3人	9人	2人	8人
		女性	6人		6人	
	30代	男性	7人	16人	6人	25人
		女性	9人		19人	
	40代	男性	6人	22人	13人	30人
		女性	16人		17人	
	50代	男性	5人	15人	6人	15人
		女性	10人		9人	
	60代	男性	4人	13人	5人	5人
		女性	9人		0人	

1 『中国2010年人口普查資料』によれば、中国 広東省の朝鮮族人口は18,588人で、1982年の154人から120倍もの増加をみている。また、京畿道安山市は、ソウル市の南西約30キロに位置する工業都市で、安山市(2017)によると、2017年7月末時点における朝鮮族の人口は44,288人である(なお、同市による分類では、朝鮮族は「韓国系中国人」(한국계중국인)と称される)。



【図1】中国 広東省の地図 (<http://map.baidu.com/>により作成)



【図2】韓国 京畿道安山市の地図 (<http://map.naver.com/>により作成)

- 2 広東省調査の被験者のより詳細な居住地域は、以下のとおりである（調査票により把握できた範囲で示す。（数字）は人数を表す）：
- 深圳市 宝安区 (23)、深圳市 竜崗区 (9)、東莞市 (16) (長安鎮 (9) を含む)
 - 深圳市 南山区 (7)、惠州市 惠城区 (5)、広州市 白雲区 (4)、その他 (11)
- 3 広東省調査、および安山市調査の被験者の中国内における出身地は、以下のとおりである（（数字）は人数を表す）：
- [広東省調査]
- 黒龍江省 哈爾濱市 (53) (五常市 (20)、尚志市 (12)、阿城区 (6) を含む)
 - 黒龍江省 鶏西市 (13)、遼寧省 大連市 (4)、吉林省 延吉市 (2)、その他 (3)
- [安山市調査]
- 遼寧省 瀋陽市 (12)、黒龍江省 哈爾濱市 (9) (五常市 (2) を含む)、吉林省 延吉市 (7)
 - 吉林省 吉林市 (7)、吉林省 和龍市 (3)、吉林省 蛟河市 (3)、吉林省 梅河口市 (2)
 - 吉林省 長春市 (2)、吉林省 舒蘭市 (2)、吉林省 龍井市 (2)、黒龍江省 牡丹江市 (2)
 - 遼寧省 撫順市 (2)、山東省 青島市 (2)
 - その他 (12)、吉林省 (3)、遼寧省 (3)、黒龍江省 (2) [省名のみは原文ママ]、未回答 (8)

表をみてわかるとおり、本調査では、両地点とも、20代から60代の男女を対象に調査を実施しているが、諸般の事情により男女の比率が世代ごとに均質ではないので、本稿の分析においては、主に調査地点による比較を中心にとすることとし、必要に応じて世代による比較も取り入れることにする。

4. 分析

本章では、質問紙調査の結果を分析する。具体的には、分析の前提となる（1）言語環境について概観したあと、（2）言語使用、（3）言語意識について分析を行なう。

4.1. 言語環境

まずは、言語環境についてみてみよう。具体的には、在住年数や教育歴、職業についてみることにする。

まず、在住年数と在住予定年数を尋ねた結果をみてみよう：

【表2】平均在住年数、平均在住予定年数

	中国・広東省		韓国・京畿道 安山市	
	在住年数	在住予定年数	在住年数	在住予定年数
20代	2.4年	21.7年	3.8年	18.7年
30代	9.6年	20.6年	6.8年	34.6年
40代	15.3年	16.9年	9.9年	30.2年
50代	16.7年	14.0年	7.1年	21.7年
60代	23.8年	8.1年	12.7年	2.00年
平均	14.3年	16.1年	7.9年	28.9年

表をみると、まず在住年数については、20代を除き広東省の方が長いことがわかる。これは、広東省への移住が京畿道を初めとする韓国内への移住に比べ、比較的早い時期から始まっていたことを反映した結果とみてよいだろう。しかし、その一方で、在住予定年数についてみると、30代、40代、50代においては、京畿道の方で広東省より圧倒的に長い年数を示していることがわかる。これは、広東省在住の朝鮮族は、老後の比較的早い時期に自らの出身地（あるいは他の地域）への移住を計画する人が多いのに比べ、京畿道在住の朝鮮族は、定住志向が強く、帰郷や帰国への意志が相対的に弱いことを意味するものである⁴。

また、自身が通っていた小学校、中学校が、それぞれ朝鮮族学校、漢族学校のいずれであったかを尋ねた結果は以下の通りである⁵：

4 안산시 (2017) によると、2017年7月末時点における朝鮮族人 (44,288人) のうち、登録外国人の内訳は、訪問就業 (16,865人)、永住 (5,471人)、訪問同居 (1,671人)、結婚移民者 (1,283人) となっている。

5 「朝鮮族学校」、「漢族学校」という名称は、朝鮮族の間でよく用いられる名称を便宜的に使用しているものであり、必ずしも中国の学校教育における正式名称を指すものではない。前者においては（主に朝鮮族に対して）（中国）朝鮮語による教育が、後者においては（漢族、あるいはその他の民族に対して）漢語による教育が実施されている。なお、以降に示す表において、選択した被験者が1人もいなかった項目については、空欄により示すことにする。

【表3】通っていた小学校、中学校

	中国・広東省				韓国・京畿道 安山市			
	小学校		中学校		小学校		中学校	
	朝鮮族学校	漢族学校	朝鮮族学校	漢族学校	朝鮮族学校	漢族学校	朝鮮族学校	漢族学校
20代	6 (66.7%)	3 (33.3%)	4 (44.4%)	5 (55.6%)	4 (50.0%)	4 (50.0%)	3 (37.5%)	5 (62.5%)
30代	13 (81.3%)	3 (18.8%)	12 (75.0%)	4 (25.0%)	16 (64.0%)	9 (36.0%)	18 (72.0%)	7 (28.0%)
40代	21 (95.5%)	1 (4.5%)	19 (86.4%)	3 (13.6%)	16 (53.3%)	14 (46.7%)	17 (56.7%)	13 (43.3%)
50代	14 (93.3%)	1 (6.7%)	14 (93.3%)	1 (6.7%)	12 (80.0%)	3 (20.0%)	11 (73.3%)	4 (26.7%)
60代	13 (100%)		13 (100%)		5 (100%)		5 (100%)	
計	67 (89.3%)	8 (10.7%)	62 (82.7%)	13 (17.3%)	53 (63.9%)	30 (36.1%)	54 (65.1%)	29 (34.9%)

表をみると、いずれの地域も概ね（年齢が高くなるほど）朝鮮族学校に通っていた人が多いことがわかる（ただし、両地域を比較してみると、京畿道在住者は、広東省在住者に比べ、漢族学校の卒業生の比率がやや高い）。朝鮮族学校では、1990年代まで日本語教育が積極的に行なわれていたことを考えると、30代以上の在外朝鮮族の多くは、(中国)朝鮮語や韓国語に加え、漢語、日本語といった言語を解するであろうことが予想される⁶。

さらに現在の居住地でどのような職業に従事しているかを問うた結果は、以下の通りである：

【表4】職業

	警備	観光	教育	農漁業	工事建設	貿易	飲食	製造工場	販売	その他	
中国 広東省	20代		1(11.1%)		1(11.1%)	4(44.4%)			3(33.3%)		
	30代		1(6.3%)	2(12.5%)			8(50.0%)	1(6.3%)	4(25.0%)		
	40代		1(4.5%)	1(4.5%)			11(50.0%)	2(9.1%)	1(4.5%)	5(22.7%)	
	50代	6(40.0%)				1(6.7%)	4(26.7%)			3(20.0%)	
	60代	6(46.2%)						6(46.2%)	1(7.7%)		
	計	12(16.0%)	2(2.7%)	4(5.3%)		2(2.7%)	27(36.0%)	2(2.7%)	8(10.7%)	16(21.3%)	2(2.7%)
韓国 京畿道 安山市	20代		1(12.5%)	2(25.0%)			1(12.5%)	3(37.5%)	1(12.5%)		
	30代		2(8.0%)	4(16.0%)		1(4.0%)	4(16.0%)	8(32.0%)		6(24.0%)	
	40代			4(13.3%)			6(20.0%)	2(6.7%)	15(50.0%)		3(10.0%)
	50代				1(6.7%)	3(20.0%)		5(33.3%)	6(40.0%)		
	60代					2(40.0%)			2(40.0%)		1(20.0%)
	計		3(3.6%)	10(12.0%)	1(1.2%)	11(13.3%)		12(14.5%)	34(41.0%)	1(1.2%)	10(12.0%)

表をみると、広東省では貿易や販売、京畿道では製造工場や飲食、工場建設に従事している人が多いことがわかる。調査協力機関の職員へのインタビューでは、広東省在住者は韓国企業や日本企業での通訳・翻訳に従事している人が多いこと、京畿道在住者はいわゆる肉体労働に従事している人が多いという情報が得られており、上記の結果もこのような現状を反映したものとみることができる。

6 花井みわ(2011)によると、1980年代の延辺朝鮮族自治州内の中学校における外国語教育は、英語が0%で、日本語が100%であったが、2000年以降になると日本語教育の比率は35%になり、2010年台になると、ほぼ英語中心の教育に変わったという。

4.2. 言語使用

次に言語使用についてみてみよう。具体的には、対話者による言語使用や、テレビの視聴状況についてみる。

まず、居住地において、対話者（上司、同僚、朝鮮族の友人（同郷／非同郷）、韓国人）ごとにいかなる言語を使用しているかを「(中国) 朝鮮語」、「漢語」、「韓国語」に分けて問うた結果をみてみよう：

【表5】対話者による言語使用（比率）

中国 広東省

	上司			同僚			朝鮮族の友人 (同郷)			朝鮮族の友人 (非同郷)			韓国人		
	朝	漢	韓	朝	漢	韓	朝	漢	韓	朝	漢	韓	朝	漢	韓
20代	13.3	68.9	17.8	26.7	67.8	5.6	60.0	34.4	5.6	31.1	62.2	6.7	36.7	3.3	60.0
30代	23.3	58.7	18.0	38.8	55.6	5.6	57.5	40.6	1.9	33.8	59.4	6.9	37.5	5.0	57.5
40代	25.2	65.2	9.5	44.8	51.0	4.3	61.0	33.8	5.2	32.9	63.3	3.8	24.8	1.9	73.3
50代	40.0	50.0	10.0	47.3	43.3	9.3	65.3	32.7	2.0	41.3	54.0	4.7	29.3	0.0	70.7
60代	47.5	51.7	0.8	67.7	30.0	2.3	75.4	23.1	1.5	58.5	39.2	2.3	37.7	0.0	62.3
全体	29.9	58.9	11.2	45.0	49.5	5.4	63.8	32.9	3.2	39.5	55.6	4.9	33.2	2.0	64.8

韓国 京畿道

	上司			同僚			朝鮮族の友人 (同郷)			朝鮮族の友人 (非同郷)			韓国人		
	朝	漢	韓	朝	漢	韓	朝	漢	韓	朝	漢	韓	朝	漢	韓
20代	20.0	8.8	71.3	26.3	25.6	48.1	35.0	46.7	18.3	30.0	53.0	17.0	21.4	0.0	78.6
30代	10.6	10.6	78.8	9.5	16.2	74.3	39.4	22.9	37.7	25.6	30.3	44.2	14.2	0.0	85.8
40代	9.6	3.6	86.8	10.4	14.4	75.2	20.5	30.0	49.5	16.5	32.0	51.5	12.3	0.0	87.7
50代	23.1	0.2	76.7	17.6	13.6	68.9	24.2	15.8	60.0	31.1	17.4	51.4	11.6	0.0	88.4
60代	33.8	8.8	57.5	45.0	11.7	43.3	45.0	11.7	43.3	45.0	11.7	43.3	83.3	0.0	16.7
全体	14.5	6.1	79.4	14.8	16.1	69.1	30.1	26.2	43.7	24.4	30.3	45.3	16.9	0.0	83.1

まず、上司に対する言語使用をみると、広東省ではいずれの世代においても漢語、京畿道では韓国語の使用が多いことがわかる。これらは、いずれも当該地域における優勢言語（変種）と一致するため、対話者の言語（変種）に合わせて言語を使用していることを表すものであると考えられる。

次に、同僚に対する言語使用をみると、広東省では40代までの世代においては漢語が、50代以上においては（中国）朝鮮語が多く、世代差が認められる。その一方で、京畿道においては、上司への使用率よりは劣るものの、やはり韓国語の使用が多いことがわかる⁷。

また、朝鮮族の友人（同郷）に対する言語使用をみると、広東省では（中国）朝鮮語の使用率が高い一方で、京畿道では相対的に（中国）朝鮮語の使用率が低く、それに代わって特に韓国語の使用率が高くなっていることがわかる。このことは、同じ在外朝鮮族であっても韓国語が優勢な環境においては、自らが言語形成期に獲得した変種よりも韓国語によるコミュニケーションが

7 ただし、韓国語の使用率が朝鮮族の同僚と韓国人でどのように変わるかについては、追って、より詳細な分析を行わなければならない。

選好されるという、注目すべき結果を示したものとえよう。

さらに、朝鮮族の友人（非同郷）に対する言語使用をみると、広東省では50代以下の世代で漢語の使用率が高いことがわかる。これは、同じ（中国）朝鮮語であっても、例えば、吉林省（延辺）出身の話者と、黒龍江省出身の話者では、その変種的乖離が大きく、コミュニケーションに支障があると判断され、共通して理解する変種である漢語にシフトするためと思われる。また、京畿道でも同じようなシフトが起こるようではあるが、その際に選択される言語（変種）が漢語より韓国語の方が優勢であるという点で異なる。つまり、非同郷の朝鮮族との対話においては、共通に理解する変種としての当該地域の優勢言語（変種）が選好されるということがわかる。

最後に、韓国人に対する言語使用をみると、いずれの地域、世代においても韓国語の使用率が高いということがわかる。

以上、対話者による言語使用の差異の分析から、在外朝鮮族は、漢語はもちろん、（中国）朝鮮語と韓国語を異なる言語変種として受け入れており、広東省では対話者によって使用されやすい言語に顕著な差異がみられるのに対して、京畿道ではいずれの対話者にも韓国語の使用が総じて多いという対照的な傾向が確認された。

続いて、漢語によるテレビ放送、韓国語によるテレビ放送の視聴程度を「とてもよく見る」、「よく見る」、「時々見る」、「ほとんど見ない」に分けて問うた結果をみてみよう：

【表6】言語別のテレビ放送視聴程度⁸

中国 広東省

	漢語テレビ				韓国語テレビ			
	とても	よく	時々	ほとんど	とても	よく	時々	ほとんど
20代	6(66.7%)	3(33.3%)				3(33.3%)	5(55.6%)	1(11.1%)
30代	14(87.5%)	2(12.5%)				3(18.8%)	8(50.0%)	5(31.3%)
40代	16(72.7%)	5(22.7%)	1(4.5%)			10(45.5%)	9(40.9%)	3(13.6%)
50代	5(33.3%)	7(46.7%)	3(20.0%)		3(20.0%)	8(53.3%)	3(20.0%)	1(6.7%)
60代	8(61.5%)	3(23.1%)	2(15.4%)		2(15.4%)	6(46.2%)	5(38.5%)	
計	49(65.3%)	20(26.7%)	6(8.0%)		5(6.7%)	30(40.0%)	30(40.0%)	10(13.3%)

韓国 京畿道

	漢語テレビ				韓国語テレビ			
	とても	よく	時々	ほとんど	とても	よく	時々	ほとんど
20代	1(12.5%)	1(12.5%)	1(12.5%)	5(62.5%)	6(75.0%)	2(25.0%)		
30代	7(28.0%)	2(8.0%)	4(16.0%)	12(48.0%)	19(76.0%)	5(20.0%)	1(4.0%)	
40代	1(3.3%)	3(10.0%)	12(40.0%)	14(46.7%)	28(93.3%)	2(6.7%)		
50代		3(20.0%)	3(20.0%)	9(60.0%)	11(73.3%)	2(13.3%)		2(13.3%)
60代			5(100%)		3(60.0%)	2(40.0%)		
計	9(10.8%)	9(10.8%)	25(30.1%)	40(48.2%)	67(80.7%)	13(15.7%)	1(1.2%)	2(2.4%)

8 調査においては、各選択肢に以下のような目安を提示している：

「とてもよく見る」…90分以上 「よく見る」…60分以上89分未満
「時々見る」…10分以上59分未満 「ほとんど見ない」…9分未満

表をみると、漢語テレビは、広東省では「とてもよく見る」あるいは「よく見る」を選ぶ被験者が多く、京畿道では特に20代、50代を筆頭に全ての世代で「ほとんど見ない」を選ぶ被験者が多いことがわかる。また、韓国語テレビは、広東省では「時々見る」、「よく見る」を選ぶ被験者が多く⁹、京畿道では「とてもよく見る」を選ぶ被験者が多いことがわかる。つまり、居住地域で接しやすいテレビの視聴が多くなるという傾向があることがわかる。

4.3. 言語意識

続いて、言語意識についてみてみよう。具体的には、言語能力への自己評価、聞いて理解するのが難しい韓国語、第一言語だと思ふ言語、今後重要な言葉、子供への（中国）朝鮮語教育に関する質問への回答を分析する。

まずは、（中国）朝鮮語、韓国語、漢語能力への自己評価を「とてもよくできる」、「よくできる」、「少しできる」、「全くできない」により問うた結果をみてみよう¹⁰。

【表7】言語能力への自己評価
中国 広東省

	朝鮮語				漢語				韓国語			
	とても	よく	少し	全く	とても	よく	少し	全く	とても	よく	少し	全く
20代	8(88.9%)	1(11.1%)			9(100%)				2(22.2%)	4(44.4%)	3(33.3%)	
30代	11(68.8%)	4(25.0%)	1(6.3%)		13(81.3%)	3(18.8%)			2(12.5%)	9(56.3%)	5(31.3%)	
40代	22(100%)				21(95.5%)	1(4.5%)			4(18.2%)	14(63.6%)	4(18.2%)	
50代	14(93.3%)	1(6.7%)			12(80.0%)	3(20.0%)				12(80.0%)	3(20.0%)	
60代	13(100%)				9(69.2%)	2(15.4%)	2(15.4%)		1(7.7%)	8(61.5%)	4(30.8%)	
計	68(90.7%)	6(8.0%)	1(1.3%)		64(85.3%)	9(12.0%)	2(2.7%)		9(12.0%)	47(62.7%)	19(25.3%)	

9 박경래 외 (2012) では、東北3省、および山東省 青島市に住む朝鮮族、計759名（20代前後～61歳以上に分布）の言語使用実態を調査しているが、これによると、吉林省では73.0%、遼寧省では80.1%、黒龍江省では67.6%、青島市では72.2%の被験者が1日に1時間以上、韓国のテレビを視聴しているという（本調査では「よく見る」、「とてもよく見る」に相当）。このような結果をふまえると、広東省在住の朝鮮族のテレビ視聴状況は、上記の地域とは、大きく異なる傾向を示しているといえる（なお、高木丈也（2016,2017）でも朝鮮族4、5世を対象にテレビの視聴時間を調査しており、ここでも韓国テレビの視聴時間の多さが指摘されている）。

10 本項目は、本来「話す、聞く、書く、読む」という技能別に質問項目を設定して回答を得たものであったが、広東省の被験者の回答においては、4技能における顕著な差がみられなかった。そこで、本稿では4技能の平均値により算出し、比較することにする。なお、本稿では性差に関しては、立ち入った分析を行っていないが、吉林省 延吉市と遼寧省 大連市の朝鮮族学校の学生1,007名に対するアンケート調査を分析した新井保裕・生越直樹・孫蓮花・李東哲（2017）では、両地域共に女性はソウルのことばを志向し、男性は漢語（中国語）を志向するという共通性が存在するとしている（ただし、その程度は地域によって異なるとの指摘もしている）。

韓国 京畿道

	朝鮮語				漢語				韓国語			
	とても	よく	少し	全く	とても	よく	少し	全く	とても	よく	少し	全く
20代	3(37.5%)	1(12.5%)	2(25.0%)	2(25.0%)	2(25.0%)	1(12.5%)	5(62.5%)		3(37.5%)	4(50.0%)	1(12.5%)	
30代	8(32.0%)	12(48.0%)	5(20.0%)		5(20.0%)	15(60.0%)	5(20.0%)		5(20.0%)	18(72.0%)	2(8.0%)	
40代	15(50.0%)	13(43.3%)	2(6.7%)		12(40.0%)	14(46.7%)	4(13.3%)		10(33.3%)	18(60.0%)	2(6.7%)	
50代	2(13.3%)	13(86.7%)			1(6.7%)	14(93.3%)			1(6.7%)	9(60.0%)	5(33.3%)	
60代	2(40.0%)	3(60.0%)				5(100%)				3(60.0%)	2(40.0%)	
計	30(36.1%)	42(50.6%)	9(10.8%)	2(2.4%)	20(24.1%)	49(59.0%)	14(16.9%)		19(22.9%)	52(62.7%)	12(14.5%)	

地域ごとに表をみてみると、広東省では、(中国) 朝鮮語と漢語は「とてもよくできる」を選んだ被験者が、どの世代でも圧倒的に多いのに対して、韓国語は「とてもよくできる」を選ぶ被験者が少なく、「よくできる」、あるいは「少しできる」を選択する被験者が相対的に多いことがわかる。また、京畿道では、(中国) 朝鮮語、漢語に対する自己評価は広東省より低く、一方で韓国語に対する自己評価は相対的に高いことがわかる。

また、聞いて理解するのが難しい韓国語があるかを尋ねた結果は以下のものであった：

【表8】聞いて理解するのが難しい韓国語

	中国・広東省		韓国・京畿道 安山市	
	ある	ない	ある	ない
20代	8 (88.9%)	1 (11.1%)	4 (50.0%)	4 (50.0%)
30代	15 (93.8%)	1 (6.3%)	13 (52.0%)	12 (48.0%)
40代	18 (81.8%)	4 (18.2%)	17 (56.7%)	13 (43.3%)
50代	12 (80.0%)	3 (20.0%)	9 (60.0%)	6 (40.0%)
60代	11 (84.6%)	2 (15.4%)	1 (20.0%)	4 (80.0%)
計	64 (85.3%)	11 (14.7%)	44 (53.0%)	39 (47.0%)

表をみると、広東省においても京畿道においても、聞いて理解するのが難しい韓国語が「ある」と答えた被験者が総じて多かったが、その比率は、広東省で高く、京畿道で低いという結果になった。これは、韓国語との接触頻度の違いを反映したものであると考えてよいだろう。

次に、第一言語だと思える言語は何であるかを問うた結果をみてみよう：

【表9】第一言語だと思える言語

	中国・広東省			韓国・京畿道 安山市		
	朝鮮語	漢語	韓国語	朝鮮語	漢語	韓国語
20代	1 (11.1%)	8 (88.9%)		4 (50.0%)	4 (50.0%)	
30代	4 (25.0%)	12 (75.0%)		7 (28.0%)	9 (36.0%)	9 (36.0%)
40代	8 (36.4%)	14 (63.6%)		9 (30.0%)	8 (26.7%)	13 (43.3%)
50代	14 (93.3%)	1 (6.7%)		9 (60.0%)	2 (13.3%)	4 (26.7%)
60代	12 (92.3%)	1 (7.7%)		1 (20.0%)		4 (80.0%)
計	39 (52.0%)	36 (48.0%)		30 (36.1%)	23 (27.7%)	30 (36.1%)

表をみると、広東省では、40代以下は「漢語」を選ぶ人が多く、50代以上は「(中国) 朝鮮語」を選ぶ人が多い人が多いことがわかる。これは、若年層にあっては、漢語が優勢のバイリンガルが増えていることを意味するものである。また、京畿道では、広東省のようにはっきりとした傾向をみせてはいないが、(広東省にはみられない)「韓国語」を第一言語であると認識している被験者が一定数存在していることは、注目に値するだろう。本来、言語形成期に獲得した変種ではないにも関わらず、生活の中でそれを自己の言語として受け入れ、使っているという事実は、彼らの言語適応への柔軟性を示しているといつてよいだろう。

また、今後重要な言語に対する意識は以下のとおりであった：

【表10】 今後重要な言葉

	中国・広東省				韓国・京畿道 安山市			
	朝鮮語	漢語	韓国語	なし	朝鮮語	漢語	韓国語	なし
20代	1(11.1%)	2(22.2%)	6(66.7%)		1(12.5%)	1(12.5%)	6(75.0%)	
30代		3(18.8%)	13(81.3%)		1(4.0%)	4(16.0%)	18(72.0%)	2(8.0%)
40代		4(18.2%)	17(77.3%)	1(4.5%)		3(10.0%)	23(76.7%)	4(13.3%)
50代		5(33.3%)	10(66.7%)		1(6.7%)		10(66.7%)	4(26.7%)
60代		2(15.4%)	9(69.2%)	2(15.4%)		1(20.0%)	3(60.0%)	1(20.0%)
計	1(1.3%)	16(21.3%)	55(73.3%)	3(4.0%)	3(3.6%)	9(10.8%)	60(72.3%)	11(13.3%)

表をみると、広東省でも京畿道でも「韓国語」を選んだ被験者が多かった。これは、現在の自己の言語使用、言語能力はさておき、今後、韓国語を媒介として韓国人、韓国社会との関係がより密接になっていくと考えている被験者が多いということの意味するものであろうが、一方でいづれの地域においても「(中国) 朝鮮語」を選んだ被験者が極めて少なかったという点も注目される。これは「韓国語」を学ぶことで中国朝鮮族としてのアイデンティティが継承可能であると考えている人々が多いことを表している可能性もあり、今後の(中国) 朝鮮語の存続における1つの方向性ともなりえるものである。

最後に子供への(中国) 朝鮮語教育について「必ず教えたい」、「できれば教えたい」、「本人が望めば教えたい」、「あまり教えたくない」、「全く教えたくない」、「わからない」という6項目(選択式)により問うた結果をみてみよう¹¹：

【表11】 子供への(中国) 朝鮮語教育

	中国・広東省		韓国・京畿道 安山市					
	必ず	できれば	必ず	できれば	望めば	あまり	全く	わからない
20代	7(77.8%)	2(22.2%)		1(12.5%)	1(12.5%)	3(37.5%)	1(12.5%)	2(25.0%)
30代	12(75.0%)	4(25.0%)	12(48.0%)	2(8.0%)	4(16.0%)	1(4.0%)	4(16.0%)	2(8.0%)
40代	19(86.4%)	3(13.6%)	9(30.0%)	6(20.0%)	3(10.0%)	3(10.0%)	3(10.0%)	6(20.0%)
50代	13(86.7%)	2(13.3%)	4(26.7%)	4(26.7%)	3(20.0%)	3(20.0%)		1(6.7%)
60代	12(92.3%)	1(7.7%)	3(60.0%)		1(20.0%)			1(20.0%)
計	63(84.0%)	12(16.0%)	28(33.7%)	13(15.7%)	12(14.5%)	10(12.0%)	8(9.6%)	12(14.5%)

11 質問項目の設定においては、손영 (2013) を参考にしている。

表をみると、広東省では「必ず教えたい」、「できれば教えたい」を選択した被験者のみが確認され、いずれの世代においても「必ず教えたい」が7割を超えていることから、民族語（変種）の継承に対する意欲が極めて高いといえる。一方で、京畿道では、全体としては「必ず教えたい」が多いものの、その比率は3割強と広東省よりは圧倒的に低く、「あまり教えたくない」、「全く教えたくない」といった継承に消極的な回答をする被験者も相対的に多くなっている。このような差をみせるのは、【表2】でみたように広東省在住の朝鮮族は、いずれ出身地に戻ろうと考えている人が多いのに対し、京畿道在住の朝鮮族は、帰国を考えている人が少なく、定住志向が強いといったこととも関係がありそうである。

5. 結論

本稿では、中国 広東省、韓国 京畿道に居住する朝鮮族を対象に実施した質問紙調査の結果を通して、在外朝鮮族の言語環境、言語使用、言語意識について分析を行なった。本稿において明らかになった点は、主に以下の3点に要約される：

（1）言語環境

在住年数は広東省、在住予定年数は京畿道で長く、広東省在住者は帰郷志向が、京畿道在住者は定住志向が強い。また、卒業した小・中学校は、地域を問わず、朝鮮族学校が多く、職業は、広東省では流通業、京畿道では肉体労働に従事する人が多い。

（2）言語使用

対話者による言語使用をみると、広東省では対話者によって使用されやすい言語に差異がみられたのに対して、京畿道ではいずれの対話者にも韓国語の使用が総じて多い。また、テレビの視聴については、現地語による番組の視聴が多い。

（3）言語意識

言語能力への自己評価は、広東省では(中国)朝鮮語と漢語で高く、京畿道では韓国語で高い。また、聞いて理解するのが難しい韓国語の有無は、両地域とも「ある」との回答が多いものの、その比率は、広東省で高く、京畿道で低い。さらに、今後重要な言語は、両地域とも韓国語を選択する被験者が多い一方で、子供への(中国)朝鮮語教育については、両地域とも「必ず教えたい」という被験者が多い(ただし、その比率は広東省で高い)。

本稿は、これまで多く調査されてこなかった在外朝鮮族の言語状況について解明したという点においては、新たな知見を含むものであるといえることができる。しかし、その一方で、本稿の分析は、質問紙調査のデータ分析(現状把握)のみに留まったため、上述のような結果をもたらす背景や要因、さらにはそれらが彼らのアイデンティティの形成や、地域社会との関わり方に及ぼす影響については、十分な分析が行なえなかった。今後は、各被験者に対するインタビュー調査なども実施をしながら、さらなる分析を続けていきたい。

【謝辞】

本研究を行なうにあたり、広東省朝鮮民族連合会の馬学哲先生、安山市 宋バウナ議員、レインボー通商 宮川淳代表には格別なご協力を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。また、

調査にご協力いただいた皆様にも心より御礼申し上げます。なお、本研究は、慶應義塾大学 学
事振興資金（個人）の交付を受けて行なわれたものです。

【参考文献】

- 新井保裕・生越直樹・孫蓮花・李東哲（2017）「中国朝鮮族言語使用・意識の共通性と多様性—延吉市と大
連市のアンケート調査結果比較—」, 社会言語科学会第40回研究大会 発表要旨
- 高木丈也（2016）「遼寧省地域朝鮮語話者の言語意識—瀋陽市朝鮮族中学における質問紙調査の結果から—」
『学苑』905, 32-40
- 高木丈也（2017）「중국 조선족 4, 5 세의 언어사용과 언어의식」(中国朝鮮族 4, 5世の言語使用と言語意
識) 『제 13 차 코리아학국제학술대회 논문문집』 Vol. 1, 81-98
- 趙貴花（2016）「第2章 北京の「韓国城」（コリアンタウン）——改革開放が生み出した新しい都市コミュ
ニティ」『移動する人びとの教育と言語—中国朝鮮族に関するエスノグラフィ—』81-108
- 南玉瓊（2016）「朝鮮族の深圳市への移動とエスニック・コミュニティの形成」『立命館国際研究』29-1, 131
-154
- 花井みわ（2011）「中国朝鮮族の人口移動と教育—1990年以後の延辺朝鮮族自治州を中心として—」『早稲田
社会科学総合研究』11-3, 61-82
- 박경래 외（2012）『재중 동포 언어 실태 조사』(在中同胞言語実態調査) 국립국어원
- 안산시（2017）「2017 년 7 월 외국인 주민 현황」(2017年7月外国人住民現況)
[https://stat.iansan.net/sn3hcv_skin/doc.html?fn=MjAxNzA4MTEwOTMxMTAxNDc-.xlsx&rs=/cwwboard/
fileupload/fileviewer/53/2017/](https://stat.iansan.net/sn3hcv_skin/doc.html?fn=MjAxNzA4MTEwOTMxMTAxNDc-.xlsx&rs=/cwwboard/fileupload/fileviewer/53/2017/) (安山市ホームページ、閲覧日：2017年8月17日)
- 손영（2013）『中國 丹東 居住 朝鮮族의 言語에 대한 社會言語學的 研究』仁荷大学博士学位論文
- 예동근（2009）「공생을 만드는 주체로서의 조선족 : '제 3의 정체성' 형성에 대한 논의 : 재한조선족의
현실과 전망」『在外韓人研究』19, 127-154
- 장안리（2016）「Cultural identity, social capital and immigrant enclave : Meaning making process of the Ko-
rean Chinese (Joseonjok) Diaspora in Korea」『한국문화연구』31, 167-222
- 国务院人口普查办公室, 国家统计局人口和社会科技统计司（2012）『中国2010年人口普查资料』（中国 第6
回人口センサス）中国统计出版社